

大阪

OSAKA

会社の業績悪化で失職した女性が起業したベンチャー会社が先月、男女協働参画の意識が高い企業を表彰する「大阪市きらめき企業賞」に選ばれた。企業コンサルティング業「アルトスター」(大阪市淀川区)の社長、石尾雅子さん(46)。

転職より独立の道を選び、悪戦苦闘しながら会社を育てた。不況で雇用不安が広がっている今、「会社に頼っているから不安になる。自分で自分を食べさせる覚悟を持たばきっと乗り切れる」と話している。(中井美樹)

大阪市きらめき企業賞を受賞

失職し起業したベンチャーの石尾雅子社長



取引先のホームページをチェックする石尾雅子社長
—大阪市淀川区

会社頼らず食べる覚悟

消費者の視点に立ったコンサルティング業務が主な仕事だ。13年に有限会社化し、18年に株式会社化。現在、社員は6人になり業績も伸び続けている。受賞の理由は、子育て中の女子社員の自宅をサテライトオフィス化するネットワークの構築や、社員が一時保育にかかる費用を援助する取り組みなどが評価された。

平成11年、石尾さんは工業用パソコンメーカーの貿易事務部門で働いていたが、業績悪化で大阪の事務所が閉鎖。人員整理のための希望退職の応募に手を挙げた。会社の将来に希望も持たず、男性社員ばかりが重用される社風にも嫌気がさしていた。

安定した収入を失うことへの不安は大きく別の会社に再就職も考えたが、当時は、中学2年と小学6年の2人の娘を持つシングルマザー。「雇ってくれる会社は少ないだろうし、もし就職できたとしても子供たちが大学を卒業させるほどの給料はもらえないだろう」と起業を決心した。

成功のヒントを求めてあちこちのセミナーに参加。そこで出会ったIT仲間と始めた飲食店などのアンケートを集める仕事にきつかけで人脈が広がった。女性ならではの視点からの指摘が、好評でコンサルティングの仕事が舞い込むようになってきた。

例えば、クリーニング店のコンサルタントでは、洋服の整理番号タグを付ける際に爪に負担がかかるようにホチキスの使用をやめるなどきめ細かにアドバイス。その店の売り上げは4倍に成長した。

起業当時を振り返り「生活は苦しかった。おかずは納豆かモヤシが定番。そのモヤシすら、今日必要かどうか、迷いながら買っていましたから」と石尾さん。「けれど100円、50円にこだわる生活が、消費者としての視線を鍛えてくれたのかも知れない」と笑う。

退職してからの10年を振り返り、石尾さんは「人を頼らず、自分で前向きに勉強すると、そこにチャンスがあった」と話す。今も自己成長の努力は惜しまない。起業仲間と定期的に勉強会を開き、お互いのアイデアを出し合いビジネスチャンスにつなげている。

不況が深刻になり、雇用の不安が高まっているが、石尾さんは「会社に頼らず『自分で自分を食べさせる覚悟』を持たば失業は怖くない。希望しない業種の会社だつて、一生居ると思わず一度就職してみるのもいい。次の仕事への糧になるはず」と話していた。